

第三三回大会講演要旨（平成二八年一二月三日）

柄鏡形（敷石）住居址研究の五〇年

昭和女子大学教授 山本 暉久

縄文時代の住居構造の中でとりわけ異彩を放っているのが、「敷石住居址」である。この住居構造の大きな特徴は、床に石を敷くという点と、住居に付属して突出する出入口施設（張出部）と呼んでいる）をもつことにある。その住居構造が、柄鏡（手鏡）に似ていることから、別に「柄鏡形住居」とも呼ばれている。また、床面に敷石をもつことも大きな特徴であるが、中には敷石を持たない柄鏡形住居も存在していることから、筆者は総称として、「柄鏡形（敷石）住居」と呼ぶことを提唱している。この特異な構造をもつ住居は、関東・中部地方を中心として、縄文時代中期終末期にこつ然と出現し、概ね後期中葉期にその伝統を絶つという時空的特性を有している。

筆者はこれまで、この特異な住居構造に関心をもち、いくつかの研究を重ねてきた。その研究のきっかけとなったのは、昭和四二（一九六七）年二月から三月にかけて行われた、横浜・市南区・洋光台・猿田遺跡の調査であった。住宅団地造成に伴い、早稲田大学桜井清彦先生が団長となって実施された、縄文時代中期を中心とする比較的小規模な集落遺跡であったが、そこから検出された、第一〇号住居址と命名された住居址の調査を、当時大学二年生であった筆者が担当することとなったのである。この住居址は調査の結果、その当時初めての発見となった床面に敷石をもたない「柄鏡形住居址」であった。その当時、こうした構造をもつ住居址は床面に敷石をもつことから「敷石住居址」と呼ばれていたが、この調査によって敷石をもたない柄鏡形構造をもつ例も存在することが明らかとなったのである。この住居址を調査団長であった桜井清彦先生はその短報において「柄鏡形住居」として紹介された。筆者は初発見となった柄鏡形住居址を自らの手により調査するという幸運に恵まれたことにより、以来現在に至るまで「柄鏡形（敷石）住居址」の研究を重ねて、五〇年を経過することとなった。今回の講演では、これまでの研究成果に基づき、筆者なりの見解を明らかにすることを目的とした。

ところで、「敷石住居址」、筆者のいう「柄鏡形（敷石）住居」は、大正二三（一九二四）年一〇月、東京府南多摩郡南村（現・東京都町田市）高ヶ坂（こがさか）字坂下の地の牢場遺跡において初めて発見され、翌大正二四（一九二五）年一〇月、稲村坦元・後藤守一・柴田常恵

らにより発掘調査が行われた。「高ヶ坂遺跡」は、この牢場遺跡と隣接する「稲荷山遺跡」、それと少し離れて存在する「八幡平遺跡」の三遺跡の総称であり、その後、大正一五（一九二六）年二月に国指定史跡として保存され今日に至っている。この「敷石住居址」が発見された大正末年は、別に大正二三（一九二四）年六月、富山県氷見郡氷見町（現氷見市）朝日字馬場所在の朝日貝塚の貝層下から我が国初発見となった縄文時代の住居址が検出され、また、大正一五（一九二六）年五月には、千葉県東葛飾郡大柏村（現・市川市）姥山貝塚の調査が東京帝国大学人類学教室によって実施され、我が国初の竪穴住居址が群として発見されており、縄文時代の住居構造に「竪穴住居址」と「敷石住居址」が存在することがほぼ同時期に明らかにされるという学史を有している。しかし、その後「竪穴住居址」は縄文時代の一般的な住居構造として認識されてきたのに対して、「敷石住居址」は、その特異な構造上の特徴から、一般的な住居構造とは認識されず、特異な施設・祭祀にかかわる施設などとその特異性が指摘され今日まで至っている。

戦前の研究では昭和一五（一九四〇）年、後藤守一が『人類学・先史学講座』第一六卷（雄山閣）において、「上古時代の住居（中） B. 敷石住居址」をまとめ、その当時検出されていた事例を集成し、分布、型式分類、構造上の特徴について触れた最初の論文として評価されよう。戦後の研究では、寺田兼方が國學院大學考古学会機関誌「若木考古」誌上において、昭和三二（一九五七）年から三四（一九五九）年にかけて七回に分けて連載した「敷石住居址の研究（一）」（七）（若木考古第四四・四六・四九・五一・五三号）が特筆される。寺田は、事例の集成、分布と立地、構造、施設、遺物、編年、性質、特殊性等を詳細に論じ、敷石住居址研究上の画期をなしたものと評価される。寺田の敷石住居址に対する研究視点は今日もなお重要さを失っていない。

筆者は、こうした研究動向の中、その出現期のあり方に目を向け、当時にあつて一般的な住居構造であつたという立場に立ち、その特異性は、時空を限った歴史性にあるとの認識を示し、そうした立場からさまざまな角度から検討を加えてきた。すなわち、その出現過程をみると、中期後葉期に、住居の奥壁部を中心として、いわゆる「石柱・石壇」と呼んでいる部分的な敷石行為が出現し、同時に出入口部に埋設された「埋甕」に伴う小張出が発展して、中期終末期に柄鏡形（敷石）住居へと完成を遂げたこと、それが発展を遂げつつ、分布域を拡大して、概ね後期中葉期に伝統を絶つという時間的変遷を明らかにした。そのことから、柄鏡形（敷石）住居址の変遷過程を、第一期…出現期（中期後葉）、第二期…確立期（中期終末期…後期初頭期）、第三期…発展期（後期前葉期）、第四期…終末期（後期中葉期）と、大きく四期に分けて考えている。

現在もなお、意見の相違がみられる、柄鏡形（敷石）住居址の性格をどうとらえるかといった点については、筆者は一般的な住居とする根

抛次のように考えている。①敷石住居＝柄鏡形（敷石）住居の成立は、中期後葉段階の竪穴住居の形態・構造上の変化過程の中にとらえられるのであり、別系統で突如出現したとは見なしがたい。②柱穴や炉址の存在から、上屋が架けられていたことは間違いなく、竪穴住居との違いは敷石や張出部の存在だけである。③出土する遺物からみても日常使う土器や石器が出土していて特殊性をうかがいえない。④祭祀用具（第二の道具）とみなされる石棒や石剣などの出土は、とくに柄鏡形（敷石）住居址に限られるものではなく、第二の道具の出土の多さは、縄文時代後期以降の時代的特性として理解される。⑤集落址内にあつて、竪穴住居址が主体となつて、柄鏡形（敷石）住居址が限られた存在で検出されることはなく、しばしば複数かつ群在して検出されている。⑥発見事例も今日多数にのぼつており（平成二二年六月段階の集成になれば、発見遺跡数は二二五六箇所に達する）、これらを特殊な施設とみなすならば、なぜそれほど多くの特殊施設を構築しなければならなかったということの説明しなければならない。

以上、柄鏡形（敷石）住居址をめぐる研究について、これまでの研究成果にもとづいて筆者なりの見解を明らかにしてみた、最後に、今後の柄鏡形（敷石）住居址をめぐる研究上の視点を列挙しておきたい。①出現過程をどうとらえるべきなのか。柄鏡形（敷石）住居がどのような過程を経て出現をみたのかといった点については、議論が分かれており、いまだ決着をみていない。今後の議論の深化が期待される。②柄鏡形（敷石）住居は、その分布的特性からみて縄文時代中期終末期になんらかの外部的影響下（大陸からの伝播といったような）にこつ然と出現したものとは考えられない。③柄鏡形（敷石）住居の成立過程は、住居内に敷石するという行為がどのような過程から行われるようになったのか、柄鏡形（敷石）住居の付属施設として特徴的な「張出部」はどのような過程を経て成立をみたのか、という二つの側面から解明されるところと考えられる。

参考文献

- 山本暉久 一九七六「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』第二八卷二号、三号 一一三七頁、一一二九頁（財）古代学協会
山本暉久 二〇〇二『敷石住居址の研究』六一書房
山本暉久 二〇一〇『柄鏡形（敷石）住居と縄文社会』六一書房